

子どもわらへば、さばれ植てみんとて、うへたれば、秋になるまゝに、いみじくおほくおいひろござりて、なべての杓にもにす、大におほく成たり、女悦けうじて、さと隣の人にもくはせ、とれどもとれどもつきもせずおほかり、わらひし子孫もこれをあけくれ食てあり、一里くばりなどして、はてにはまことにすぐれて、大なる七八は、ひさごにせんと思ひて、内につりつけておきたり、さて月比へて、いまはよく成ぬらんとて見れば、よくなりにけり、とりおろしてくちあけんとするに、すこしおもし、あやしけれどもきりあけてみれば、物ひとはた入り、なにかあるらんとてうつしてみれば、白米の入たる也思かけずあさましとおもひて、大なる物にみなをうつしたるに、おなじやうに入てあれば、たゞことにはあらざりけり、すゞめの志たるにこそと、あさましくうれしければ、物にいれてかくしをきて、のこりの杓どもをみれば、おなじやうに入てあり、これもうつしくつかへば、せんかたなく多かり、さてまことにたのもしき人にぞ成にける。○下

〔藩翰譜二〕或時若君家光徳川大殿の御寢殿の屋の軒端に雀の巣をくひ子を生みたりしを、こなたより御覽じて、欲しがらせ玉ひ、長四郎信綱平とりて參らせよとあり、長四郎年十一才のときなれば、いかにも叶ふまじきよし辭しければ、君は驚きて飛去ることもありなん、巣くひし所よく見置て、日暮てこなたの屋の軒の端さして登り、彼處に忍び行て取べし、おとなは身重く、足音もしなんたゞ汝取てまゐらせよと候ふ人々の教へしかば、力なく日暮てこなたの屋よりして、つたひく行く、既に御寢殿の軒に至りて、取らんとせしに踏損じて、御坪の内へどうと落つ、將軍家秀忠徳川御刀取て障子引あけ玉へば、御臺所燈火とつて出させ玉ひ、御覽するに、長四郎にて在けり、將軍家不思儀に思召して、汝は何しに爰には來りぬるぞと御尋ありしに、今日の晝、この御殿の屋の軒端に、雀の子うみたるを遙かに見て、餘り欲しさに參りて候と申、將軍家いやく、おのが心にはあらじ誰がをしへけるぞといろくに御推問あれども、幾度も初め申し、言